

## 第12回日本へき地保健医療研究会報告

第12回日本へき地保健研究会

会 長 越 山 健 二

第12回日本へき地保健医療研究会が昭和55年11月7日、8日の両日上市町の厚生年金富山つるぎ荘で、富山県、県医師会や富山県農村医学研究会など4団体の協賛を得て行われた。両日の参加者は117名で県内外から関係者が集まり熱心な討議が行われ盛会であった。

第1日目は上市町のへき地山村集落で体験宿泊をしてもらった。それは従来からへき地医療を推進するために組織された集落の保健指導員6名の住宅に、希望者の宿泊を依頼したものである。特に第2日目に企画したパネルディスカッション「へき地住民の暮らしと保健」を担当された司会者の本研究会会長柳沢利喜雄氏、特別発言者の富山県農村医学研究会会長豊田文一氏も参加された。宿泊当日、各地区では、地区住民と共に夕食をとり、文字通り膝をまじえて談会が行われた。この事はNHKの取材もあり、その一部はテレビを通じて報道された。従来へき地保健を担当したり、これを論ずる人たちは都市に住む人が多いのであるが、この学会を機に直接、へき地住民の生活の中で一夜の宿泊を体験された事は、貴重なものであったと思われる。

第2日目は9時開会、9時35分より10題の研究発表が行われ、その要旨については講演集にも記載されているので略するが、各地に於けるへき地医療の実情や活動、調査や評価について貴重な報告がなされた。特に北里大学植松稔教授の富山県における難病、自治医大菊知浩教授の自治医大卒業生の動向、特別発表で本学研究会会長豊田文一氏の越中の奇病（一その発端一）等は興味や関心の高いも

のであった。

特別講演は「へき地農村の経済」と題し、富山大学新田隆信教授によって行われ、憲法第14条25項の解説にはじまり、へき地の概念、過疎化、生活経済の変容、へき地経済の指標、その対策、問題と展望等について詳述され、学問的な立場から多大の感銘と認識を深めた。講演の冒頭にKarl Busseの詩、「山のあなた、山のあなたの空遠く「幸い」住むと人のいう噫 われ人を尋め行きて 涙さしぐみかえりきぬ 山のあなたになお透く「幸い」住むと人のいう。が朗読され、先生自身、如何に山村の自然や住民を愛敬し、その価値や、振興について情熱をもっておられるかが、静かな口調の中で感ぜられ貴重な講演であり感動的であった。

今学会のハイライトとも言うべきパネルディスカッションは、第2日目の午後日本へき地保健医療研究会長、自治医大名誉教授柳沢利喜雄氏の司会により、2時間にわたって行われた。発言者は長野県富草診療所長金子勇氏、秋田県十文字町開業医西成辰雄氏、城端厚生病院長寺中正昭氏、同院勤務の自治医大第1回卒の林智之氏、上市町保健指導員稲垣忠一氏、上市厚生病院保健婦神谷貞子氏の6名、特別発言者は本学研究会会長豊田文一氏、富山県厚生部長三橋昭男氏、上市町長清水美晴氏の三氏であった。会場からも追加や反論、要望もあり熱気を帯び有意義で時間の不足が感ぜられた。その発言や討議は別にまとめる事になっているが、概略を記述する。

長野県のへき地で20年間診療所長をしながら千葉大学講師としてへき地医療を実践した金子氏は体験宿泊や新田教授の特別講演もふまえ全国的な視野に立って日本のへき地や、住民意識、疾病、医療等について述べ、今日へき地の現況は極めてきびしい状況にあり、生活の変容から新しい産業基盤が整備されなければ、人口の流出は止まらなると述べた。20年勤務する中で村がさびれ医療そのものが沈滞し、勤務する医師自身も沈み込んでしまう。へき地は食糧供給、国土保全、人間性回復の場、文化遺産、古里の意識など存在意義が十分に残されており、そこに住む住民は消極的にならず、元気を呼びもどす事が大事だと強調、長野県のへき地と比較して、上市は平坦地が多く積雪を除けば、かなり条件がよく、国の第三次全国総合計画などの取り組みもなされているが、依存的にならず山合いに新しい墓も見受けられ愛着も深いようだ。未だ再成力が残されており勇気を出してそれが枯渇しないようにしなければならないと述べた。

秋田県の西成氏は秋田県の23市町村に37の無医地区があり、へき地中核病院が3ヵ所ある。検診や巡回診療も巡回に行われ、交通事情もよくなり救急医療の活動や歯科診療も充実しつつあるが、なお婦人の貧血や、へき地に於ける受診率が低く、県平均値に近づくまで上昇させる事が必要だと述べた。

城端病院寺中氏は富山県で初めてへき地中核病院の指定を受け、五箇山・利賀村に於ける健康の推移について述べ、身体的訴えは多いにもかかわらず受診率はなお低く、しかも入院日数は長い事を指摘し、通院可能な患者を考慮したバスの運行も必要だと述べた。又上市地区に於ける保健指導員を主体にしたへき地医療システムについて高い評価もあった。

へき地中核病院に富山県初の自治体病院第1回卒業生として城端厚生病院に赴任した中林氏は上平村診療所で1,000人足らずの住民

の診療の実際について6ヵ月の経験を述べた。五箇山も都市化現象で、生活の内容は平地と変わらず、道路の改善等によってもはや孤島のイメージはないが、問題は青年男女の働き場がない事だと指摘した。医療は検診その他で若い人の関心も高く、むしろ恵まれていると思われるが、診療所は1週3回であり、医療に対する相談、教育など相談相手になる医師が必要であると述べた。村は今日尚有機的に連携され共同体的な意識も強く、医師としても働き甲斐があると述べた。

上市町西種で長年へき地保健指導員を受け持つ稲垣氏は世帯数57、人口224名の集落の過去、現在に於ける人間と暮らしの変容について述べ、過疎化も進んだが、若者のUターンも見られ、新生児が誕生し希望がもてるようになった現在、へき地や、山村の言葉そのもののイメージが若い人の定着をさまたげ、嫁の受け入れにも困るのではないかと。働き口や、除雪対策など問題もあるが、美しい自然環境、伝統的な文化、風俗、祖先から受けた遺産も色濃く残されており、充足しつつある保健医療にも期待しながら集落の再生を期したいと熱意と希望を述べた。又町村合併で上市町へ移管されたが、その事によって山村集落が行政の谷間にしないよう努力してほしいと要望した。

上市厚生病院保健婦神谷氏は、上市厚生病院が実施するへき地巡回診療や、へき地医療システムの概要を述べ、その中で過疎化の進んだ白萩東部と白萩南部を比較し過疎率の高い東部と、過疎率の低い南部について比較検討を行い(本誌 頁別記掲載)その要因や問題点、今後の対策等について考察を試みた。

以上が発言者6名の概要である。2~3会場から追加、質問もあり特別発言者からそれぞれ発言がなされた。

特別発言者、3者の発言内容は次の如きものであった。清水上市町長は、山村へき地の重要性は国や県、町も重視しており、そのた



め人口が減少しないための努力が全国的になされている。先ず学校を整備した。次は道路をよくしたが人口と流れが止まない。結局は産業をおこして若年層を止める事を考えなければならぬ。農業、林業、河川対策もいろいろと行っているが、それだけで流れを止めるわけにはいかない。医療面ではへき地中核病院の指定を受けるなどあらゆる方面から人口の流れを止める様に努力したいと述べた。続いて富山県三橋厚生部長は昭和49年当時厚生省医務課課長補佐としてへき地医療問題と取り組んだ当時者でもあり、へき地を点としての医療対策でなく、へき地中核病院などの線の対策として考える方策を立案した経緯について述べ、富山県では4つを指定する予定だが、最初に指定を受けた城端厚生病院が自治医大卒業生2人を迎えて立派な成果をあげつつある事に立案者の一人として喜びを感じており、残る3つについても大きな期待をよせると述べた。富山県農村医学会の豊田会長は、厚生連高岡病院に勤務した昭和16年当時や終戦後の開拓時代の五箇山の巡回診療の実態などの体験を述べられ、富山県のへき地のイメージは変り、へき地の言葉に抵抗が出るのも無理はないと述べ、医療は検診や巡回診療だけで完結するものではないので持続的で抱括的な対応が必要であり、上市地区で実施するへき地医療システムも評価出来るが、法的な整備も必要であると指摘、世界列国のへき地医療対策を見聞した中で、共産圏やマイクロネシア等の医療事情について述べた。尚石川県輪島市50km沖あいのへくら島で勤務する自治医大卒の敷島和徳医師が司会者の指名により離島診療の体験を述べた。島の人口は季節により変動があり九州や山陰方面からの人も多く、気性が荒く、海女の生活など島の環境が激しく変化する中での苦勞をのべ、住民の生活の中にとけ込む事が何よりも必要で、医療以前の問題が重要であり具体的な表現で貴重な体験をしていると述べた。施設は整備

され、診療に事欠く事はないと結んだ。

司会、柳沢会長よりへき地住民の暮らしと保健のテーマは日本医療の中でも重要なものであり、特に暮らしの中にはすべてのものが包含されており、あらゆる方面から貴重な発言がなされ感謝の言葉が述べられ、パネルは終了した。午後5時30分よりつるぎ荘の食堂にて懇親会が行われ、会員相互の親睦を深め、2日間の日程は盛会裡に無事終了する事ができた。

日本の医療はその効率化と普遍化、抱括性と持続性が指摘されている。そんな中でへき地住民の医療が如何にあるべいかは重要な問題である。へき地に人が住まないようにすれば、へき地問題は解消するという考え方もあると思われるが、長い歴史の中で培われた資源や、国土保養など数量化されない価値を見直し、今日稍もすると失われんとする人間性の回復をはかるためにも、そこに住む住民の暮らしや保健に目を蔽うてはならない。時代は激しく変動し高度技術革新の中で、医療の対応も変化があろうが、住民に継続的に接触して、変化する地域環境の中で肉体面はもとより、意識、心などの精神面及び生活面を含めた保健対策の必要にせまられているように思われる。

プライマリーケアや地域医療は花盛りであるが、今後の医療の模索は、今日尚強い連帯感と協力があり、厳しい環境の中で生きついでいる小さなコミュニティの中で求められ造られ試行される事が必要と考えている。そんな意味から、この学会の果たした役割も大きいと思う。協賛して戴いた富山県、県医師会、農村医学研究会、上市町、全国から参加された会員各位に対し深く感謝の意を表します。

# プログラム

11月7日(金)

集 合 14:00~14:30 (上市厚生病院大会議室)

挨拶・オリエンテーション 14:30~15:40

上市町の概要説明 上市厚生病院長 越山 健二

宿泊体験 16:30~8日(土)の8:20まで

上市町の中心部から約8km~10kmの山村集落に住まわれる方に依頼して、分散宿泊をしていただくものです。

11月8日(土)

開 会 式 9:00~9:30

- 1.開会のことば 第12回 会長 越山 健二
- 2.挨拶 日本へき地保健医療研究会長 柳沢利喜雄
- 3.祝 辞 富山県厚生部長 三橋 昭男  
富山県医師会長 本多 幸男  
上 市 町 長 清水 美晴

研究発表 9:35~11:00

- 座長 自治医科大学公衆衛生学教授 柳川 洋
- 1.精神科夜間診療11年間の経験  
富山県上市厚生病院精神科医長 安藤 次郎
  - 2.富山県における難病  
北里大学医学部公衆衛生学教授 植松 稔
  - 3.寒河江保健所管内における健康づくり  
山形県寒河江市寒河江保健所長 町野 重憲
- 座長 北里大学医学部公衆衛生学教授 植松 稔
- 4.子宮癌検診の受診率を高めるための加藤式自己擦過法の評価  
名古屋公衆医学研究所 加藤 勝也
  - 5.自治医科大学卒業生の動向  
自治医科大学公衆衛生学 ○菊地 浩  
柳川 洋・橋本 勉
  - 6.健康望月町建設計画における老人福祉対策  
自治医科大学名誉教授 柳沢利喜雄

特別講演 11:00~12:00

座長 上市厚生病院長 越山 健二

「へき地農村の経済」

富山大学経済学部教授 新田 隆信

昼 食 12:00~12:40

(つるぎ荘の食堂に用意してあります。)

総 会 12:40~13:20

研究発表 13:20~14:20

- 座長 富山県中新川郡医師会長 片山 高明
- 7.山村集落の栄養調査(第2報)  
富山県上市厚生病院○岩城 睦子・藤原 智子  
神谷 貞子・越山 健二
  - 8.農地帯別にみたへき地医療の実情  
秋田県平鹿郡十文字町 開業 西成 辰雄
  - 9.越中五箇山,利賀村の生活実態と一日総合検診  
富山県城端厚生病院○寺中 正昭・中林 智之  
米道 昌代・杉山 春美
  - 10.市町村における公衆衛生活動  
—医療機関の協力状況—  
自治医科大学公衆衛生学○後藤 敦・横山 英明  
橋本 勉・柳川 洋・菊地 浩

パネルディスカッション 14:20~16:20

「へき地住民のくらしと保健」

司会 日本へき地保健医療研究会長 柳沢利喜雄

発言者

- 長野県下伊那郡阿南町富草診療所長 金子 勇  
秋田県平鹿郡十文字町 開業 西成 辰雄  
富山県城端厚生病院長 寺中 正昭  
富山県城端厚生病院内科医員 中林 智之  
富山県上市町西種 保健指導員 稲垣 忠一  
富山県上市厚生病院 保健婦 神谷 貞子

特別発言者

- 金沢大学名誉教授 豊田 文一  
富山県厚生部長 三橋 昭男  
上 市 町 長 清水 美晴

特別発表 16:20~17:10

- 座長 自治医科大学公衆衛生学教授 菊地 浩
- 越中の奇病 —その発端—  
富山県農村医学研究所長 豊田 文一

懇 親 会 17:20~ 場所 つるぎ荘の食堂

11月9日(日) 研修視察

研究発表様式

発表時間10分,追加討論4分以内の予定です。  
スライドプロジェクターは1台用意してあります。